

筑波大学審査学位論文（博士）

論文題目： ゴーチエにおける芸術教育思想の特質
—人間形成論的側面に着目して—

人間総合科学研究科学校教育学専攻

氏名：川上若奈

1. 問題の所在と研究の目的

本研究は、近代教育制度の萌芽期である 19 世紀フランスにおいて、芸術教育に関して独自の思想を展開した、作家かつ芸術批評家テオフィル・ゴーチエ (Théophile Gautier, 1811-1872) における芸術教育思想について人間形成論的側面に着目して検討し、芸術教育思想史の流れに位置付ける可能性を提起することを目的とする。

我が国の教育目標たる、いわゆる「知・徳・体」の育成のうち「徳」の部分と芸術が密接な関係にあるという思想は、プラトン (Πλάτων, 428/427-348/347 B.C.) より現代まで受け継がれており、芸術は教育の営為にとって不可欠であるとされてきた。しかし、現在の状況をみると、芸術や美と、人間形成の要素としての道德及び教育との目的の関係の認識が曖昧なまま、道德教育の教育内容が構築されていることに気づかされる。すなわち、芸術は道德や教育を目的とし得るのか、あるいは両者は全く別のもので、目的が重なり合うことはないのかという関係に関する認識の問題である。そのうえ、このような曖昧な認識は、学校における道德教育においては、年齢段階に関わらず教材として一律に読み物資料を与えたり、「美しさ」についての学習が「心の美しさ」にすり替えられてしまったりすることにつながっているのではないだろうか。このような問題を克服する第一歩として、芸術と道德と教育の関係に関して、これまで検討されてこなかった新たな視点を得ることが必要である。

道德教育を主題として芸術について論じているものとして、デュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917) の『道德教育論 (*L'éducation morale*, 1925)』があげられる。ここでデュルケムは、芸術と道德は、自己以外のものを志向させる点では共通し、感性や意志の昇華という消極的な役割を認める一方、イメージを伝え、想像力に訴える芸術は、現実の世界である道德の世界と遊離しているため、基本原理を芸術的陶冶に負うごとき道德性は、想像力の遊びに解消されてしまうとした。しかし、デュルケムの『道德教育論』において展開されるような、芸術の教育的効果を消極的に見る思潮のみが 19 世紀のフランスを席卷していたと考えることは妥当ではない。デュルケムに連なる系譜の一方で、プラトン自身が美に対しては価値を与えていたという思想からの系譜も存在していた。

芸術の教育における貢献に関して二つの相対する立場があった 19 世紀のフランスにおいて、積極的な貢献を認める立場の思想は、学校教育の枠外で展開されていた。フランスで 1800 年から 1818 年までの間に美に関する問いについて書かれたほとんど全てのものは、芸術が道德的あるいは社会的な使命を果たさなければならないということを、唯一の関心としていた。しかし、彼らの次の世代の美学界を代表する論者であるクーザン (Victor Cousin, 1792-1867) は、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の思想に関する著作も残しており、主著『真善美について (*Du vrai, du beau et du bien*, 1853)』において、直接的に道德に役立つように芸術作品を構想することを否定する。このような、芸術が道德に役立つことに異を唱えるカントからクーザンの流れを、「芸術のための芸術 (*l'art pour l'art*)」思想という、より実践的な芸術理論にまで発展させたのがゴーチエである。

このようにゴーチエは、芸術と道德との関係について、道德に役立つ芸術を推奨する思潮

を断つ「芸術のための芸術」思想を主唱した点で独自性を有する。加えて、芸術に関する著作を残し、かつ、家庭や社会における教育に文学者、及び批評家として関与した。以上の点において、その思想を解明すべき重要な人物の一人であると言える。

しかし、先行研究の状況としては、ゴーチエを対象とした研究は文学分野のみでしか為されておらず、彼の芸術教育思想は教育学研究の中でこれまで十分に検討されてこなかった。副題に「教育 (éducation)」という語を掲げるゼンキンの研究でさえも、ゴーチエの教育的側面を明らかにする目的を持っていない。ゴーチエの教育的側面に関する研究がみられない理由は、第一に、彼が主唱した「芸術のための芸術」思想というものの性格に起因していると考えられる。芸術に教育的、社会的役割をもたせることを否定し、教育と芸術とを一見切り離しているかに見えるこの思想の性格ゆえ、ゴーチエの「芸術のための芸術」思想は、これまで、芸術の教育的意義に関する議論の中でさえ検討されてこなかった。第二の理由として、美と教育に関してゴーチエが体系的な著作を残さなかったことが考えられる。しかし、ゴーチエは、このようなテーマに関して決して考えを持っていなかったわけではなく、そのような考えの表明は文学作品や批評文の中に散見されるのである。本研究は、ゴーチエの本来の意味での教育に関する思想について明らかにする初の試みとして、彼の芸術教育思想を人間形成論的側面に着目して体系的に解明することを試みるものである。

2. 研究の方法

本研究は、ゴーチエの教育思想を明らかにするにあたり、ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) の教育思想を明らかにすることを意図した森戸の研究に依拠する。この研究に依拠することは、以下の二点において、ゴーチエの教育思想の体系的理解に資すると言える。第一に、従来教育との関わりの解明が等閑視されてきた人物の教育思想を検討するという目的を共にしているという点、第二に、本研究の意図する、芸術と教育の目的の整理に資する点である。森戸は芸術教育という語は必ずしも明確な概念ではないとして、「芸術の教化作用」、「芸術を手段とする教育」、「芸術の教育」という三つの意味が含まれると整理している。本研究では森戸のこの三類型を援用し、三類型のそれぞれに関して、ゴーチエがどのように考えていたのかを明らかにする。それにより、ゴーチエにおける芸術と教育の関係についても解明できると考える。

3. 各章の概要

第1部では、ゴーチエの芸術教育思想の背景について検討した。

第1章では、芸術教育思想がどのように形成されていったのかを明らかにした。第1節では、生誕からコレージュを卒業するまでについて論述し、ブルジョワジーとしての出生、幼少期の愛読書、コレージュでの経験、家庭教育を受けた経験が、その後の彼の家族観や教育観などに影響を与えたことを指摘した。第2節では、「芸術のための芸術」思想を提唱するに至った経緯を整理した。第3節では、芸術教育思想をつくりあげていく過程に関して

論述した。彼は批評を始めた頃から、優れた作品を紹介するという社会的な意義を意識して批評家の仕事に臨んでいた。このような社会的意義への認識は、彼の芸術教育思想の展開に重要な影響をもつものであったことを指摘した。

第2章においては、ゴッテの芸術教育思想の基盤としての彼の芸術観及び教育観について検討した。第1節では、変遷する美術の様式への彼の姿勢や、芸術家に必要な「マイクロコスモス (microcosme)」という概念に関して整理した。第2節では、人々と芸術との仲介による芸術の享受への導きが、彼における人間形成の働きかけとしての教育の目的かつ方法であることを指摘した。

第2部では、ゴッテの芸術教育思想に関して、「芸術を手段とする教育」、「芸術の教育」、及び「芸術の教化作用」の三つの芸術教育の類型に従って明らかにした。

第3章では、「芸術を手段とする教育」に関する思想を明らかにした。第1節では、ゴッテが主唱した「芸術のための芸術」思想の形成には、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) やクーザンの思想が影響を与えたことを指摘した。第2節では、彼がこれを主唱するに至った背景とその内容を、宣言文とされる『モーパー嬢 (Mademoiselle de Maupin, 1835)』序文をとりあげて検討した。批評家、ブルジョワ道徳、及び有用性への批判が、この宣言の重要な要素であり、この思想が、彼の生涯を通じた基本的姿勢であると言えることを論じた。また、美の客観性と主観性に関して、カントの思想とは相違点もみられることを指摘した。第3節では、この思想の内実を迫るゴッテの著作を検討した。ここでは、芸術とは従属的に道徳的真理を表現するものでも、直接的で実際的な有用性をもつものでもないという彼の考えを指摘した。また、道徳を盾として作品の不道徳さを攻撃するような批評家の行為が偽善であり、そのような偽善が世の中にはびこっているという彼の批判について確認した。

第4章では、「芸術の教育」に関する思想について『家庭博物館 (Musée des familles)』誌を用いて明らかにした。第1節では、当時の家庭教育の状況とあわせて、当雑誌の編集方針について確認した。労働者階級の家庭教育の不備が指摘される中で、1830年代に初等教育に関する法律が制定された。それに伴い、子ども向けの定期刊行物も盛んに出版されるようになった。『家庭博物館』誌は、このような状況の中、「文学を民衆のものにする、すなわち精神の喜びによって道徳的改良を達成すること」を目的として創刊された。第2節では、寄稿作品「羊飼 (Le Berger)」と、「少女の枕 (L'Oreiller d'une jeune Fille)」をとりあげ、これらの物語に教訓が暗示的及び明示的に含まれていることを確認した。したがって、彼において、家庭における「芸術の教育」は、道徳的な教訓を含みこんだ子ども向けの文学作品を提供することによって達成できると指摘した。第3節では、「少女の枕」をとりあげ、この作品が収められた『家庭博物館』誌第12巻に、同じく「道徳の学習 (Études morales)」として掲載された11編の文章と比較した。その結果、単なる教訓物語とはせず、色遣いの工夫を施すことによって作品を「文学」たらしめる美しさを加える点において、芸術性が担保されていると指摘した。ここに、ゴッテの「芸術の教育」に関する矜持がみてとれた。しかし、明示的にせよ暗示的にせよ教訓を含ませていたことは、第1節において検討した、

彼の「芸術のための芸術」思想に反すると言わざるを得ない。ジャーナリズムの世界で作品を発表すること、また、その雑誌の出版方針に合致させ、教訓を含んだ作品を発表すること、しかしその中でも、描写の豊かさに、物語を文学作品たらしめる彼の芸術へのこだわりを入れ込んだことは、家族を養うために金を稼ぐ必要性と、「芸術のための芸術」思想の主唱者としての矜持との攻防の結果であると言える。

第5章では、「芸術の教化作用」に関してのゴーチエの考えを明らかにした。第1節では、美術館やサロン展の発展、応用芸術の普及といった時代背景を整理した。第2節では、サロン評を検討した。彼にとって批評は、美しさについて人々に説明し、分からせようとするものであった。加えて彼は、人々を良い絵画に導くことが批評家の務めであると意識していたことを指摘した。第3節では、彼の応用芸術論を検討し、大衆の芸術への嗜好の涵養のために、美しい芸術を「絶え間なくみること」が必要であり、そのためには、芸術家が用途をもった芸術を制作し、人々の間に芸術を浸透させることが必要であると主張していたことを論じた。第4節では、彼が首席編集者を務めた雑誌『アーティスト (*l'Artiste*)』誌について検討し、これが、芸術を紹介するにとどまらず、人々を芸術に近づけ、人々の芸術への嗜好を養うことのできる媒体であったことを指摘した。

第6章では、ゴーチエにおける芸術教育思想の特質について論じた。芸術教育の三類型の中で、「芸術の教化作用」という意味において、「芸術のための芸術」思想と矛盾せず、芸術と教育とを結びつけることが可能になると指摘した。芸術が「教化作用」をもつと言える理由としては、ゴーチエにあっては、芸術には魂を高めるという効果が包含されているということがあげられる。芸術には、人々の役に立たせようとする者によって教訓を組み込まれずとも、むしろ、美のみを追求した純粋な真の芸術こそ、その性質によって魂、すなわち人間の本性を高めるという教育的効果が内在しているのである。魂を高めるという芸術の効果に関しては、クーザンの思想においてもみられる。ゴーチエの芸術教育思想の特質は、「芸術のための芸術」思想という実践的な理論を構築し、人々と芸術とを仲介する必要性を説いた点である。

終章では、本研究の総括を行った。彼の芸術教育思想において、美を追求する芸術は、道徳を直接的な目的としない限りにおいて、却って魂すなわち人間の本性を高めるという点で道徳と密接に関係する。彼は、この意味で、芸術は教訓を多分に含むと述べるのであり、ゴーチエにおいて道徳とは、人間の本性としての根源的、基礎的な部分を指す。人々と芸術を仲介するという働きかけを通して、芸術の美によって人間の本性を理想に導くという思想が、ゴーチエにおける人間形成論であると言えよう。19世紀フランスの教育の潮流は、ゴーチエの芸術教育思想の言わば逆方向に流れていく。そこには、当時の公教育界における実証主義的な教育への趨勢を背景とした、芸術に対する不信感があったものと考えられる。一方で彼は、「芸術の教化作用」という意味での芸術の教育的意義を肯定し、自ら人々と芸術の仲介者として芸術教育を推進していった。したがって、ゴーチエの芸術教育思想は、近代教育萌芽期のフランスの公教育のパラダイムとは一線を画したところにあった。このよ

うな思想は、彼のような市井の作家、批評家によって提出されたものであった。

本研究は、ゴーチエの芸術教育思想の特質を立証したことに加え、芸術教育に関して断片的に書かれていたものを、人間形成論的側面に着目して整理し直した。彼の芸術教育思想によると、美そのものを追求した真の芸術に内在する性質によって、芸術は教育的効果をもつ。その意味で、自律的な芸術が却ってその性格により教育に対して効果をもつという芸術教育思想の流れの中に、その実践的な理論を提起した人物として彼を位置付けることが可能であると言える。この点について、筆者は、ゴーチエの芸術教育思想に関する散在していた著述を、原典にあたり析出、検討したことによって立証できたと考える。

〔参考文献〕

森戸辰男『オウエン・モリス』岩波書店、1938年。

デュルケム、É. (麻生誠・山村健訳)『道徳教育論 (2)』明治図書出版、1968年。

Kerlan, A., Langar, S., *Cet art qui éduque*, Yapaka.be, Bruxelles, 2015.

Lovenjoul, S. de, *Histoire des œuvres de Théophile Gautier*, G. Charpentier, Paris, 1887.

Mustoxidi, T. M., *Histoires de L'Esthétique Française 1700-1900*, Burt Franklin, New York, 1968.

Zenkine, S., Mademoiselle de Maupin : éducation et histoire, in *Bulletin de la Société Théophile Gautier*, N°16, 1994, pp.81-97.